特247
630

始

特247
630

序に代へて

私は私の心の記録を小出にし小冊子として保存することにした

よしや私の心の瓶に盛られた中味は芳香を放たなくとも、よしや、この企が愚しいものであらうとも之が私に與へられた大きな樂みの一つである。

（忌憚なき御批評をこふ）

小野忠史氏

發行年表

美の殿堂（第一詩集）　昭和五年七月壹日發行
人生の怪笑（第二詩集）　昭和六年壹月拾參日發行
三つの世界（第三詩集）　昭和七年七月參日發行
悅樂の國（第四詩集）　未刊
堂守（第五詩集）　未刊
寶石（第六詩集）　未刊
耽美家（第七詩集）　未刊
嵐の夜（第八詩集）　未刊
永遠の姿（第九詩集）　未刊

咲く花の風に
搖るる如ごと運命の
嵐の前に人は戰く

夢法師

すべてを美化し純化する
詩の聖靈に捧ぐ

345-78

（三つの世界）目次

心殘りがあるものか……21
呻が聞える……19
彼女は言ひました……18
三つの世界……16
男性の顧……15
鏡……14
影……13
黒い船……12
夜室……11
妾の胸は……10
興奮……9
クレオパトラ……7
春……4
嵐の前……3
夕日……2
ぞ沈む……1
白白……
第七天國……

何んの心残が有るものか

にこやかな貴女の瞳を見てゐると
私は限りなく幸福だ……
優しい貴女の傍にをるならば
よしや淋しい絶海の珊瑚島にをるとても
私の心は暖かだ……
美しい清かな貴女の顔を見てをると
冷い冷い氷の室にをるとても
私の心はぽかぽか、と暖かい

貴女の清らかな目が笑ひ……
華やかな貴顔に反に走る二つの筋が
笑窪となったなら……
花の蕾の様な貴女の口が
嬉しさに綻び解けたなら……
暖い香水の様な息吉
可愛い貴女の口から吐き出して
私の耳にぽちやぽちやと優に囁にもせよ

甘い事を私語いてくれたなら……
私の心も五体も眞實に
玩具のゴム風船の、その様に何處、何處までも
ふくれて行くよ
そして、よしや、終に破れたとて
なんの恨も痛みも、未練もあるものか
世界中で一番、氣にいって
一つの貝の上下の蓋の様、私の心にぴったり
合った美しく優しく可愛い貴女が
彫眼まして、くれたのだもの

よし、それが
美しいローズの花の性感な棘の
撫る手管だったとて
何んの恨も痛みも、心残も有るものか
美しく優しく可愛い貴女の
なった事だもの

呻が聞える

初夏の夜
日が沈んだ後に
晝の暖味が未だ
花咲く草叢に
花の影に緑の葉影に殘り
花の香と匂と暖き土の堀が
蔭り蟲がブンブンと微かに蠢く

花は頭を垂れし樣に
黑髮を亂すが如く
下に垂れて深い蔭りに入り行く
闇の底に……
花の嘆息が
大地の吐く息が
蟲が寢所を探して得られぬ歎聲が
洩れ聞える……
星が瞬く花の寢所の淋を覗く

私は其時、座に下り立ち
闇を透かして耳を澄ました
そして大きな聲なき呻の聲を明に聞いた

幾億萬の大波小波が月に輝き
日に照り夕陽に紅に染まる大海を渡べ
氷塊長く閉ず大雪山を戴せ
滿々と大廣野を走り流るる大河を浮べ
百數月に嘯く大森林を配し
燈光日映る數衆の大都會を載せて
マラソンの勇士の如く
福を識たて、
走り出る美女の樣に……
疾風に曝されて億萬里の道程を
盲目に運命の命ずるまゝに
ひた走りに走り乱りに乱る
色も香も艶も望もなき
無終の旅に蠢く

地球の大きな呻を悲しそうな呻を
仄かなる闇の底に蹲る
美しい花の影に、目に見えぬ
小蟲の呻の中に聞いた

彼女は言ひました

彼女は言ひました

彼女は身長のすらり、どした
眼にはなんとも言へん魅力のある
櫻色の大理石で大彫刻家が作った
ギリシヤの石像に血と熱と
神經を通はした樣な好い女でした

よしや島田、桃割はいから耳隠
七三、くるくる巻と、どの樣に髮を結ふでも
銀、水晶、きんしゃぜる、
よしや彼女の肉体を包む衣類が
どの樣に悪しくても上等でも
よしや彼女が身じまひを
どの樣にしだらなくしてみても
きちんとしてみても
よしや笑ふても泣いても怒っても
立つても、坐っても、寝かけても、
寝をつても、その姿態その所作
一つの筋肉の微動さへ、
彼女の肌に纏はる着物の、ひだ、の
ちぶつとの微動さへ
一つ、一つ皆、それぞれ、せにも稀なる限りない
美しさと輝かしさを示現するのでした

それに彼女の可愛ゆく美しい
赤い口から滑り出る音聲は
世にも優れて稀に美しい聲でした
こんなに目映いばかり美しい、その人が
言ひました

どう、この髪に合って
どう、この着物似あって……
なんで貴男は遊で、ふと逢ふた時
敵がげじげじにでも逢ふた時の様
ふいと横道に逸れてしまったの？……
なんで貴男が優勝した時に
スタンドの傍で回も眺むばかりの喜に
咽びかへってゐる妾を
振り向きもしなかったの？……
妾が美しく装ふて立ってゐるのに
まるで路傍の立木でも見る様に
妾の傍を貴男は素通りなさったの？……
なんで貴男は月の美しく照ってゐる晩に
堀端の傍で、いと細かに妾が歌った其時に
あの窓を開き、あの階段を下り
あの石段を下りて来て何ぜに一緒に歌って
下さらなかったの？……
ぼんとに、この人は石で作った様な人
氷人形となって北の海へでも
流れて行けばよい
地獄の鬼でも迷ひ、そうな美しい、その人に
天の女神でも聞き、とれ、そうな美しい聲で
こう言はれた、その男は
堪えがたれたる嘲しさと可笑さを
吹き出した

三つの世界

俺等は萬物の霊長だ——
大それた事を言ふな
お前等は大地の反逆者だ
大地の異端者だ

俺等は科學を持ってゐる——
科學がなんだ
それは一種の屠殺場に過ぎない事に
気付かないのか？

たわけ者めが

俺等は組織と制度と道德を持ってゐる——
それがなんだ
組織も制度も道德も
結局過ぎない不純な毒血の流れる
お前等の肌の腐物を隠蔽す不完全な
高等等という事を知らないのか？
俺等は優秀な組織から編み出した
文明がある——
文明がなんだ
それは、お前等に秀麗の迷路を延長、
偽瞞なかしめる事より一歩も出ることが
出来ないのを知らないのか？

俺等には高い理想がある
これ有るがために無窮は神に近づけるのだ——
何を見當外の事を言かすのだ

どんな高い理想でも紙一枚よりも便なく
果無く價値のない事を知らないのか？……
見ろ、見ろ
俺等の理想は、生活の現實そのものが
理想なんだ
理想を現實の外に、お前等は求めるから
考へでも好い道德を崇立て反って
邪悪と虚偽に落ち
眞理を求めて矛盾に落ち
制度と組織を崇立て反って苦しみ
一歩づつ神に近づくどころか
駄足で誠よりも一番早く地獄に落ちて
行くのを覚づかないのか？……
俺等は天國も、地獄も、理想も、現實も、一切を
與へられた現實の生活の中に融合單純化して
市來の與へられた神性格を
ちつとも乱そうとしないのだ

お前等は、この大切な神性格を数十萬年前に

足蹴にし乱した大馬鹿者だ
それでおて馬鹿の霊長だなんて
自惚てゐやがる
よくもいけ図々しくそんな事を
恥かしくもなく言はれた者だ
この地獄の修羅共奴が
貴様等は今地獄の八丁目にゐるのだぞ
文明の中央にのし上つたと思つちゃ
大間違だぜ

そんな事があるものか？
俺等はお前等の様に自然に
駆使せられてはいめぞ
自然も駆使してゐるのだ——
馬鹿も大概にせい
貴様等は大の嘘つきだ
貴様等は暴風や氷雪に曝されると
恐れ戦いてゐるじゃないか
俺等は雨も風も友人だ兄弟だ

友人で為り兄弟である者の雨や風を
貴様等は敵にして、しまつたじゃないか
大馬鹿者め

貴様等が人類滅亡の時が来たと言ふく
恐れ戦く時に
お前等の眼前に俺等の仲間が
俺々と大地の懐で繁栄しく生活してをる様を
見せつけて羨ましてやる時節が
やがて来るのを気づかないのか？
其時が来るまでは
貴様等は自分の愚さを悟らず俺等を
下等動物扱にして俺等の誠意ある勧告を
耳に入れないに違つてゐる

聖霊の言ふ事を聞け
貴様等が自分の手で築き上げ
最高の生活と考へてをる都会の様は何んだ
都会ほど大きな数多い邪霊を脅迫の

ある世界が他にあるか？
都会ほど大きな数多い嫉妬と悲憤事と
虚偽と罪悪と差別と憎と苦しみの
存在充満してゐる世界が他にあるか？
享楽便利文明の魅惑無意義な倉庫であると
思いこんじゃいけないぜ
貴様等は其上に被ひかぶさうとしてゐる
地獄の主の灰色の大きな手を
認識しなければいけない
陰惨な地獄の主の吐く悪気に
毒せられてはならない

弱かくして尾かくさずの人類よ！
この期までの様に間違つた思想に
とつつかまつてゐちゃいけない
我の純なる聖霊を見出して人類の新系に資し
その未来の方向を決定せねばならない
全く間違つた考慮の出発点より
幾百万年間ひた走りに走り来つた人類は

これまで人類が習慣づけられ編み出し
培ふて来た考慮に根本を置かない
全く異なつた考慮の基礎に帰帰して
人類の進かへ進なほしに
方向を誤じなくてはならない

以上は人間と動物と聖霊の言葉であり
三つの世界の真相です

男性の願

男は何を思つてゐるか
貴女は知つてゐますか？
世界の男性が何を願ふてゐるか
貴女は知つてゐますか？
戦争に勝つ事でせうか？
財産を作る事でせうか？
名誉と地位を得る事でせうか？

男は以上のどれも、これも願ふてゐるのは
事實です
だが美しい女性の貴女よ！
貴女がその白い柔かい優しい手で
男の着物を一枚一枚剝いで
素裸にして男の胸板を一枚めくつて
覗いて御覽
貴女は今更ながら吃驚するでせう
其處に一つの燦然と輝く千古不滅の
次の様な顔がどの男の胸にも
安置されてゐるのを見て驚くでせう
「女性よ！
美しかれ美しかれ
柔やかなれ優しかれ若かれ
高潔なれ慈愛深かれ
しとやかなれ」

恵まれた世界一等の美しい優しい
女性の貴女が男を

その柔かい美しい身体で優しく抱き
愛らしい清らかな口唇で
熱いキッスをして、やつて御覽
きつと男は言ふでせう
世界で一番大切な者は貴女だと言ふでせう
名譽も榮華も權力も
皆美しく咲き誇る櫻花の前の鬼劍び
それとも貴女との生活と享樂を飾飾する
一種の化粧料に過ぎないと言ふでせう

男性は皆願ふてゐます
女性よ美しかれ優しかれ柔やかなれと
願ふてゐます
この冷々凄凄寂寞平凡單調の宇宙の中で
貴女ほどあの粗野で荒暴な男性を
笑はせ活潑づかせ希望を持たしめ
慰め和らげ滑稽する者は他にありません
若し美しい貴女等がたなくなつたなら

男性は砂ばかりか石ばかりの
滑かさも、艶かさも、柔かさも優しさも、
希望も愛も、天の雲霧の様な不可思議の戀も
色彩も、理想も華やかさも失ひ
死の沙漠の中に
猛獸の如く荒れ狂ふか石塊の如くに
默り、こくつて果てて行くでせう

あの荒々しい男性の最も憧る美しい
天國と樂園は貴女等女性の
美しい顔と白い豊麗の肌と
優しい心と優雅な姿態と
チャーミングな口から出るあの聲と
陶酔に導くあの美しい女性との樂しい
夢の様な抱擁の外ないのです

鏡

故郷の野よ！山よ！河よ！

母が形見の手鏡の様だ
昔のままなる珍奇たる純な自然の姿に
幾歳月に蠶ばまれた
人生悲喜の諸相を映す

故郷の山よ！川よ！野邊よ！
それは永劫變らない若い初戀の人の姿だ
さてもその姿の美しく懐かしいことよ！
懐かしの優しき山川に近づく時
その香高い懷に觸れる時
心は現實を離れ
しばし幻影の中に徘徊ふ
あさましい厭はしい悶へ喘ぎし人生の
過きにし姿をまざまざと
昔の姿そのまゝに然も、その一つ一つを
改めて物めづらしく
懐かしの山河の鏡の前で
隅々まで眺め、まはし果は嚙みしめ
舐ねかい抱く

故郷の川よ！・・・山よ！・
何せ、かくれ胸奈深く秘めし
過ぎにし其所々の悲喜の音律を
高く高く揺り奏ふすのだらう

黒い影

影が映る
月光に佇む人の後に
宝飛ぶ鳥の影が
還が下の青草の上に映る
窓に揺れる花の影が
水に乱れし女の髪の様に映る
歩み行く人の背後に影が動く
黒い影が彼に附き纏ふ魔の如く
恋の花の如く彼の背後に絡ふ
湯台の上に
蝋燭が閃めき
仄かなる影が映る
煌めく紅の褥に
輝く姿見の前に
美貌の彼女は嬌笑み
白い腕の婀娜な美しい指の尖が動き
盛られし紅粉が
花の口唇に塗られ
美貌の彼女は媚態に笑ふ
薄紅の花が美しく揺れる様な嬌笑
揺ゆる魅惑の瞳は
悦楽の夢を追ひ
姿見に映る銀色の光に
豊麗な代理石の様な肉体の魅惑に
吸ひ附く如く瞬きもせず見いる

紅に輝き銀色に輝き
美の充満する真紅の褥に室に
たゆわなる真白き肉体の曲線は
その美を誇る
その背後に黒い影が悩ましい影が映る
美の陶酔に溺り彷徨ふ
花の如き彼女の後に
悪魔の誘ひ奇ろ様に
暗黒の洞窟にむたむたと打ち寄する
魔の海の嗤の様に嘲笑ふ如くに
凶兆の糸を操る様に
黒い影が彼女の背後に映る
魔の手が閃絶せんばかり
目眩き誘惑の肉体を抱へ去る様に
黒い影が映る

（結）

だが彼女は輝かしき姿見の前
紅の褥の上無心に美の陶酔の中に
微かに嬌笑む

夜の船室（ケビン）

幻影の、それか？・
幻の、それか？・
仄かにも燈火は揺らぎ
四囲の物象は影を現す
ほの暗き船室
妖魔の、それか？・
怪奇の、それか？・
はたはたと帆は疾風に唸り
ザーツ、ザーツと怒濤は船側をたたく
幾重にも鉄壁にも深黒の闇の布に包まれ
虚空と無辺際のたゞ中に
魔の船が魔の磯石に揺られ引かれる如く

暗黒の航路を突き進む

哀れ暗黒に塗り、つぶされ
氷の如く冷き虚流に飲まれ
風に、さらはれんばかりの
危険と魔と沒落と乱舞と死の影の
絡むわだ中を進む船の中
唯、一つの灯明き船室
あやめも分かぬ闇黒奇界に唯、一つ
光明の宿る船室

現実のそれとしも思はれざる
不可思議の山に仮庄を示す
不思議の船室
それは幻のそれか？
幻影の、それか？
妖魔の苦示の、それか？

妾の胸は

妾の胸はわけもなく顫ふのよ
妾の肌はやはやはと柔かよ
妾の心は甘やかな優しい空想で一杯で
紅い夢やら紫の幻を描くのよ
妾の赤い血潮は清らかで
妾の夢や幻の火を赤々と燃やすのよ

何人の何人か
妾の胸の夢幻をどの様に
壓へて下さるか
何人の何人か
妾の夢や幻をどの様に
撫げて下さるか
妾は、それが何よりも嬉かかりで
それが何よりも嬉しい期待なの
妾の胸の鼓を鳴けるなら
この樂みと嬉さと心配が一杯で

外には何一つない白紙なの

山河こえて流り来る
春の小鳥よ！
告げて、おくれよ
妾の胸や何時どんなに
ほころぶか
磯づたひ荒波こえて行く鳥よ！
告げて、おくれよ
妾の胸に巣くふ人の所在は
何處なのか？

興奮

政治や大政革や革命や
集團の大事は何處で定まったか
何處で原動力が動いたか知ってゐるか？……
本の中の思想からと思ってはいけない
本の中の思想は死物だ

それ自身もっとも活動力を持ってゐないんだ……
一人の人と人との相談からと思っては
いけないそりや他の人の考を
知ったといふだけだ
未だ何んの活動狀態となって
現はれてはいやしない……
英雄の威壓と思ってはいけない
そりや単に命令だけだ
燃ふと否とは民衆の勝手だ……
之等は未だ燃え上る火焔となってゐない

民族や、大集團に
大きな衝撃や最後の決斷と
動員令を與へるものは
集團の興奮だ
屋内屋外の會談の興奮だ……
感奮興起耳朶を打つ旗幟
單刀直入肺腑を震撼せしむる弁
割れるが如き喝采と拍手

これで意図と民族の心は
大事決行の魔酔薬を
十分有効にかけられてしまったのだ……
彼等はもう心から絶対服従である
しかも喜と勇躍にはやり、きってゐる
反抗する別まぐれ者は怨
踏み躙られてしまふ
そして誰もそれに同情しない……
全衆の興奮には人生の潮流と
民族と歴史進展の
最重最大の威力と魔力がある
それは最も成力ある爆薬だ

クレオパトラ

白き妙なる腕
乳房の張らみ
曲線の魅力と
豊麗の肉線の心よさに

政敵とエジプトの国運の隆昌も忘れた
我と我が美に
誇らかに微笑んで
勝利の總を心に描いた

華麗の王宮に
美しき浴室に
花園に、林に
熱帯の静かな月夜に
青き月光の波に溶しては
彼女が美の上に
白い薔薇の心を捧げた

美、美、しかも鐵も石も、
英雄も、シーザーも、アントニーも、
エジプト国民も、蛮人も蛮民も
波も翼も黙し臥して
惚殺せらるゝ美、
それは彼女の總であった

クレオパトラ、クレオパトラ
彼女の美は
アレキサンドリア府の港の丘に
輝く燈明台の光の如く
羅馬の視線も希臘の視線も集めた

エジプト国民は
壮麗の彼女に
国運を託した
エジプトの過去と永劫は
艶麗の彼女にエジプトの光榮を託した

ああクレオパトラよ！
彼女は彼女の至極の美と
雄々しき男性の魂と
その憧の輝と逞しい男性の太息に
最も楽しき尊き一瞬を
永遠の瞬間を奏でる
音律の波動の上に霞と共に曝した

春

憧れる憧れる
春を春を
凡の男も女も
山も水も野も空も
鳥も魚も凡の物が
春を春をうるはしいなごやかな
輝き渡る春を
憧れる憧れる

春は春は全く すばらしい恍惚に充たされる
紅燈等其他あらゆる光彩で
歴は装飾せられる
魂を感銘する響音
心を夢の母界に導く青春の響音の中に
凡の物を人生、歓喜し引き入れる

私は掴もうとした、幾度も、幾度も

熟慮した幾度も幾度も
尊の崇しさの百分の一の崇しさで好いから
私の心に満悦で飾られた夕イムが
流れこむのを憧れ望んだ
十年二十年なんといふ長い期望で
あったであらう
何んと苦しい努力であったらう
だが満悦の幸運は悪しくも右に左にそれた
擦まへようとすると
おあいにく様と逃げて行ってしまった
満心の熱誠と準備で幸運の来るのを待ったが
さっぱり何んの音沙汰もなかった
私は遂に破れた傷心の孤女の如く
人生の片隅で
「俺の一生には満悦の春の様な
幸運は来ないのだ」と嘆いた

だが私は寡黙ます
輝かしい春の野の行楽に酔ふ男と女よ！

こう嘆きたいのは私唯一人でせうか？

嵐の前

あゝ祖國よ
我等の愛する郷土と民族よ
我等は今嵐の前に直面してゐることを
知ってゐるか

前古未曾有空前の大嵐の前に
立ってゐることを知ってゐるか

雲が一度来たなら家も林も墓も
木葉微塵に飛び散ってしまふかも知れない
大嵐の前に立ってゐるのを知ってゐるか

不気味な底知れぬ沈黙
凄を壁へつける様な沈黙が
四邊を蔽ひ尽してゐる

我が民族と郷土の全貌
野も山も河も森も家も海も
一様に不気味な沈黙に蔽はれてゐる
我等の祖國よ、お前はこの沈黙が
何を指示してゐるか知ってゐるか

一天を蔽ひ尽した
灰色の妖雲の下に呼吸づく
我が郷土の山も野も海も
時時の緩に来る大底現と大活劇に對して
未だ嘗つてない堅い堅い緊張を示してゐる
我等の民族よ、お前はこの決意の
どんなに重大であるか知ってゐるか

二千五百年の昔
スパルタとアゼンスが
激浪として寄する起伏の如き
ペルシヤに對してギリシヤ民族興亡の
分岐路に立って示した緊張

それは今我等民族の胸に
堅堤を破らんとする奔流の如く氾濫してゐる
我等の郷土よ、お前はこの緊張の前に
どんなに事態が切迫してゐるか知ってゐるか

長い長い甘い睦の帳の中に
比類なき清涼なる静謐の中に
優しい自然の慈母の懐の中に
深くも熟入ってゐた我等が郷土よ……
夜闇の鐘が覚めよ覚めよと
我等祖國の耳朶に心よく響いた朝
鍬と鎌火の洗礼を受けて
寝覚の床を起ってこの志に染めた
おゝ涙ぐましき我等が郷土と我等が民族よ……
未だ覚めやらぬ寝覚の床で
数倍数十倍の強敵の前に晒された武者振した
おゝ可憐拳大の我等が國土と我等が民族よ……
私は微笑むで問ふあらう
明日我等の頭上に襲ひ来る嵐の前に

お前は歴史的自覚として前方比類なき
燦々たる人類最高度の活動力を
發揮するであろう

愛しき民よ……
貧弱なる國土よ……
大海の前に孤心燈火の如き郷土よ……
幸うすく豆粒大の國土に雄々しく
輝かしき運命を預託された祖國よ……
幾度か鐵火の大試練を受け
大受難の前に立ち皆って一度も
墓場した事のない民族よ……
おゝサラミス海戰の大勝利を
現出に再現した勇健なる國民よ……
おゝツール野戰の大勝利を
現出に再現した偉大なる民族よ……
私は確固たる確信を抱いて問ふであらう
よもや明日、敵が來る大海の前に
面を臥せ敗北の臍噬を晒す様な事はあるまい

お前はテミストクレスに指導せられた
古代ギリシヤの如く
ハンニバルの鐵蹄に蹂躙せられ
危急存亡の底より奮ひ立つた
ローマの如く、どんな狂瀾の中にあつても
生氣と勇躍と研究と協力と
勝利の確信を失はず健闘するであらう

夕日ぞ沈む

夕日ぞ沈む
その影淡し
海は磯を敲めて
海の彼方より
逆潮は寄せてぞ來り
嘆ぞ傳ふ

潮騒はひそひそと
寄せてぞ來り

夕日ぞ沈む
その影淡し

白白

こんな事は歴史の本にも
道徳の本にも記載はありません
如何なる人物の如何なる演説にも一度も
聞かされた事はありません

皆さる英雄が（Sと假定する）
今まさに死なうとする時
それを傳へ聞いたSの竹馬の友で鑑者の
一貧老僧が（Pと假定する）親友の死目に
相縋りつゝ破れた衣を着て遂に來た

Sは側近の者を退けてPと逢ふた
二人は、さも懐しそうに長い間別れてゐた
十二三方の子供が相逢ふて喜ぶ様に……

S　よう來てくれた叔
P　お前もうまく大願事を、やつてのけたな
　　どうだい面白かつたかい辛かつたかい
S　始は辛らかつたが叔
　　世間といふ者は俺の思ふ通りに行かなかつたが叔
　　一度民衆と言ふが群盲と言ふかの急所をお前も知つてゐる通り二十年前の大騒動の時、國んでからは進ぶ好からうが惡からうが世の中や世間の奴等が馬鹿に見えて叔
　　俺はこの馬鹿な世間を掴まへて馬鹿と言はず我が愛する同志よ忠順なる部下とは言つたが叔
P　そうだらう、お前の行く所へ世間がついて來た、お前が來いとも何んとも言はないのに
　　世間の奴等つて何んて馬鹿で組しやすいのだらう、お前の様なやくざ男の一すの度胸と一すうまい雄弁と俺から見たら唾でも吐きかけてやりたい様な下手見えすいた術策やら底の見

えすいた浅い智慮に騙されて陥れてしまうなんて

S　は死にかけの病人らしくもなく嘲れた顔に苦に笑を浮べて
お前は偉い女間の奴等は馬鹿だ、お前の言ふ事は眞實だ

何んの事はない女間といふ女盗にたらし込まれたのだ、思ふて見りや女間といふ女の嫉妬ふ心の好性には呆きれる程だ、
何にしても女間否、民衆は鬼が嫌ひが嫌ひ強い突支棒を求めてゐるんだ
あよつぴり確乎した突支棒と見たてりや善悪の見さかいなく騙ぴついて来るんだまるで餌の前の鼻みたいなものだ
最ぴつかれる俺等にして見りや可笑いやら嬉しいやら擽ったい位だ

P　一口で言ふて見りや馬鹿な度胸のない弱い女間の奴等の前で思ひ切り一度度胸を眞實ありもしない智慮と突張を無理に絞り出して見せてやりや後はメメだ
地獄へ落ちようが極楽へ行かうが人間社會って結局その様に出来てゐるのだ
だが女間がさ嘘つた十人位の人をだつたらさ、お前と俺との間の様に喜様お前と言い合つて、さ、こんな悪な事をやらかさずに楽しく暮すのだつたぜ
いや、それの方がずつと面白かつたと思ふよ
俺は女間から、どえらい尊敬やら大きな國土やらを與へられてをるが眞實いふとこんな大それた物を受ける資格なんか無いのだ
俺は今になつて上手民衆を騙つて来たのを離羅しようと思つてゐる位さ
今三四日後、死んだら神様の前で平謝罪にあやまる考だ

それから五日後Sは死んだ
一國を挙げて否隣國の王まで、その死を悼み盛大な哀悼の式に参加した

第七天國

それは不可思議な
第七天國のある事を御存知ですか……
それは女性の心の女界です
男性の目に映る女性の赤裸々な姿です……
それは男性にとつて不可思議な物の最大の
一つである女性の胸に潜む密室の内部です

其處に女にも不可思議な
第七天國があるのです
第七天國で見る女性はどの女も一糸も
纏ふてはゐません
彼女等は赤裸々で思ふまゝに振舞ふてゐます
寝そべつてゐる者横臥してゐる者
俯伏の者手を上げてゐる者等
様々な姿態をしてゐます……
何人もこの不可思議な男禁制の
密室を覗きこむ者はありません

どんな男性でも女性の心の奥の奥にある
この密室の扉を叩きはしません
だから彼女等は其處で安心して
不可思議な悦楽を男性ではとてもう解らない不可思議な第七天國の悦楽に耽ります……
其處で彼女等は恰もサルタンが
ハレムの内部で女にも不思議な悦楽を恣にする様に第七天國の悦楽を貪り
その、たとへ様のない恍惚に陶酔します

女性の胸の中にある第七天國の
ステージヤ映画界には彼女等を無上に
憧れ陶酔させ喜ばす様々な場面が展開します……
一人の女性を中心とした
男の變人と變人の格闘がそれです
彼女等は壮快な樂音に聞き入る様な
快感味に咽んでゐるのに
妄想いわと顔を皆けます……
美しい闘雑な令夫人が社交場裡で

あなた一度見知った美者等を心の中で
人知れずそれは驚嘆に値します
そしてそれをこの上もない唯一の
何物にも代へ難い楽みとも悦びとも致します
彼女等はこんな場面を見て心の中で
黄昏の野に美しい花を見出した様な
喜悦を感じてゐるのに
まあ、はしたないわと叱語します……
それは明かな令嬢が
親しいあの男、この男をしばし忘れて
気紛に一寸好いた男と
溜瀉ホテルに人目を避けて
夢現で楽しく語ってゐます
彼女等はこんな場面を見て子供が新しい
玩具に引きつけられる様な魅力を
心の中で感じてゐるのに
まあ、お嬢様がと顔を顰めます……
華やかな中年の女性が金にまかして
あらゆる男性を侍従なる快楽と

刺戟の伴侶として、こっそりと記憶させます
そして密やかな満悦の微笑を洩らします
彼女等はこんな場面を見て美食家が
珍奇な美食にありついた時の嬉しさを
心の中で感じてゐるのに
まあ厭らしいわと目を大きく
開いて唇をひそめます

女性のふくよかな胸に潜む
第七天國の悦楽は、こんな主優しい
種類ばかりではありません
これ等は単に第七天國を約る
序幕に過ぎません……
隠づまる様な場面
男性の心では想像えろ解も出来ない場面
嬉しいのやら悲しいのやら
悩ましいのやら、それでゐて
女性の感じ易い蜜蜂の巣窟の様な胸には
ひしひしと目に見えぬ喜悦の不可思議な

重波が滲透してゐるらしいのです……
彼女等は悩ましそうに見えてゐても
阿片喫煙者が天國の様に楽しい喫煙室を
容易に出ようとしない様に
第七天國の悦楽室から出ようとは致しません
この第七天國の密室で彼女等は
喜悦の餘あのきれいな胸の肌を隠に
歓歌し喘ぎ胸を波打たすことさへあるのです
謎の宮殿沙漠に埋れた怪奇な寺院の
曲りくねった迴廊の裏にある様な
女性の胸の裏にある第七天國の密室には
あの女性がといふ様な女性さへもゐるのです
あの様に閑雅なといふ女性さへ
あの様に高雅なといふ女性さへ
見受けられるのです

これが世にも不思議な女性の胸に宿ってゐる
第七天國の赤裸々な世界です

作詩希望者ト購讀者ニ

一、申込　詩ヲ作ッテホシイ人ハ左記御一讀ノ上往復葉書ニテ御申込ミ下サイ

二、詩ノ種類　自由詩ニ限リマス

三、作詩代　1、長短ヲ論ゼズ一編壹圓
2、新聞雜誌社カラノ御注文ハ一編參圓
3、同人雜誌カラノ御注文ハ一編貳圓

四、作詩期間　一ケ月以内出來上レバ御通知致シマスカラ小爲替ニテ代金ヲ御送リ下サレバ作詩ヲ御送付致シマス

五、送金　ハ必ズ小爲替ニテ御願ヒ致シマス

六、注意　1、詩ノ批評ト改作ハ謝絶致シマス
2、餘冊ナキ事アルニ付キ本詩集御注文ノ時ハ必ズ豫メ往復葉書ニテ御照會下サイ

三つの世界

（許複製）

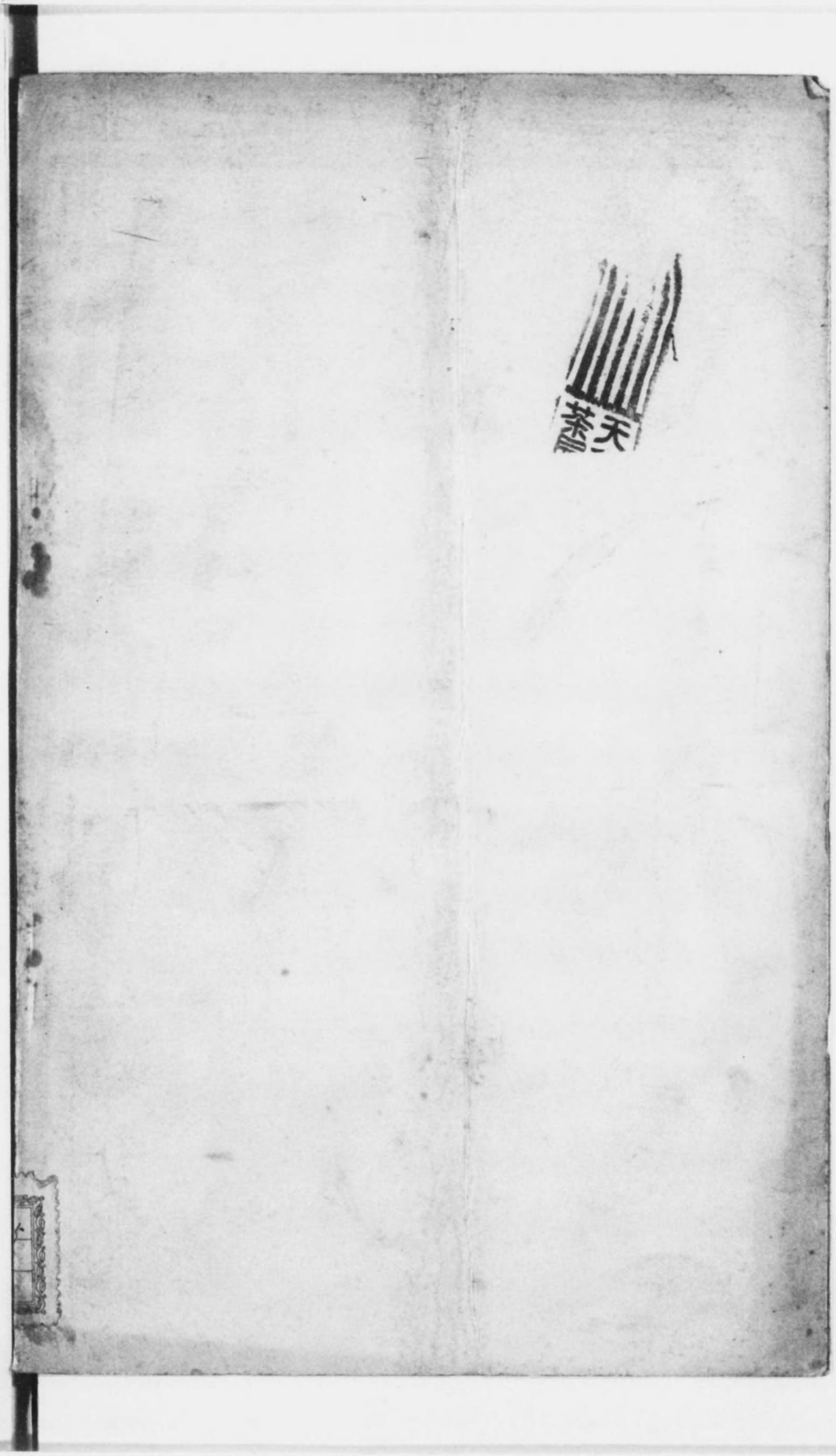
昭和七年六月廿八日印刷
昭和七年七月參日發行

定價 金貳拾錢
（送料不要）

著作兼發行者　大阪市西成區柳通四丁目八番地　小野忠夫

印刷者　大阪市北區網笠町拾番地　竹内重固

印刷所　竹内謄寫館

發行所　大阪市西成區柳通四丁目八番地　小野忠夫

終